

【厚生労働大臣賞・中学生の部】

「持ち味く同じ人間として生きる」

山口県・下松市立末武中学校

1年 曾我 采音さん

「障害」って何だろう。普通の人と違った特別なものだとよく言われるが、私には人を区別する思いやりのない言い分を感じた。障害＝特別ななら、この世の人はみんな障害者になるだろう。人には誰だって、他の人と違った得意不得意があるのだから。みんなが特別なわけだし、障害者だと言って境界線を引くのは間違っていると思った。

私には高校二年生の特別支援学校に通う兄がいる。兄は生まれつき発達障害がある。兄の障害が分かってから、毎日が不安でしようがなかったという両親が、ここまで兄を大切に育ててくれたのはなぜだろう。私がつとえ真つ白な心の持ち主だとしても、自分の子供が障害者となれば子育てへの自信は一瞬にして消えてなくなると思う。それでも子育てに向き合えたのは、兄本人がいたからだと思はう。周りの人から変な目で見られても、気にすることなく笑顔でいる兄。他の人よりおくれがあっても、一歩ずつ成長していく兄。そんな

兄を見て気が軽くなったそう。兄は、人を強くするすごい力を持っていて、人の生きる活力となる存在なのだ。

私は昔から兄が大好きだ。私たちが幼いころのビデオに映る仲むつまじい様子は、何度も目にしている。今も大好きであるという気持ちに変わりはない。ただその中に、兄をずるいと思ってしまう自分もまぎれている。私は思い通りにいかないことがあると、すぐに人に当たってしまう。中学生になってさらにいそがしくなった今は、兄にまでイライラした事を口にしてしまうのだ。

「お兄ちゃんはいいなあ。ずっと自由でいられるじゃん。」私はこの時、他人が見るような目で兄を見ていたかもしれない。私は障害者かわいそうだと思っている人と同じだったのかもしれない。自由のほしさのあまり、兄をバカにしてしまった自分がいた。母がそんな私を見て、

「お兄ちゃんも、お兄ちゃんなりにたたかっているんだよ。」低い声のトーンでそう言った。心の奥底にひびくものがあった。取り組んでいることが違っていても、必死に努力しているのは私も兄も同じだ。兄を批判するのではなく、成長できるように寄りそって応援するのが大切なのだ。自分のレベルに合った環境でなくても、なじめるように一人でたたかっている兄を、サポートできるようにになりたい。

兄は最近、できるようになったことがある。兄弟で写真をとる時、私と妹がピースをすると、同じように手を上げてポ

―ズをとるようになった。家族みんなが兄をほめ、兄は笑顔であふれていた。誰かの一つ一つの成長を喜べるあたたかい環境。そんな環境が社会に広がればどんなにすてきだろう。

私は今まで、兄といっしょに生きてきた。つらくてにげ出しそうな時も、兄が近くにいた。大丈夫？とでも言いたそうな眼差しで見つめてくる兄に、私は救われた。兄の子育てに向き合えた母の気持ちがよく分かる。心をいやしてくれる兄は、家族みんなの愛されものだ。私を救ってくれた兄を、今度は私が救う番だ。周りの人たちに兄の障害を理解してもらえるように、兄を私の兄だと自信を持って言えるようになる。

人にはそれぞれ持ち味がある。勉強が得意な人もいれば、苦手な人もいる。その持ち味が強かった時、周りの人たちは「障害者」と見なすのだろうか。普通の人と障害者の境界線をなくすには、障害者を一人の人間として認めてもらわなければならぬ。私が自信を持って紹介した兄に、周りの人たちは同じ人間として接してくれるだろうか。その関わり方次第で、社会は大きく変わってくると思う。私はみんなで作っていききたい。兄のような障害者が、みんなと対等につき合える居心地の良い社会を。